

電機ジャーナル

DENKI JOURNAL

キーワードから読む組合「ほくら」のこれから ⑥

働き方改革関連法と
付帯決議の意義

INSIDE ▶ OUTSIDE

政治:伊藤 惇夫
「なりたい」になり下がった?
安倍総理

経済:高成田 享
「地面師」を暗躍させた企業風土
企業統治の再構築が必要

地協探訪

群馬地方協議会

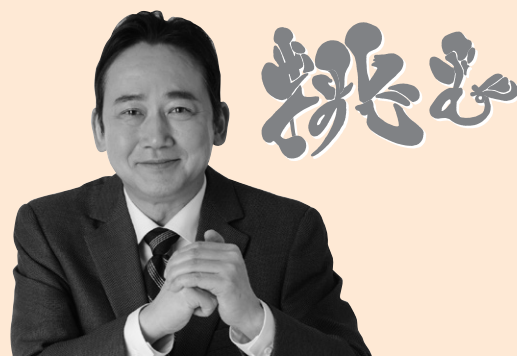
NEW MEMBER

アウトソーシングテクノロジー労働組合

大使館便り From INDIA

在インド日本国大使館 一等書記官 浦 誠治

石上としおさんの
政策を応援しよう!



石上さんの政策に関する情報はこちらから

🔍 石上としお.com

検索

📱 石上としお

🐦 toshio_ishigami



電機連合政治顧問
石上としお

中央執行委員長
野中孝泰

電機連合政治顧問
浅野さとし

電機連合政治顧問
矢田わか子

新春 座談会

電機産業で働く者の代表として

ミライを語ろう!

vol.251



新春



座談会

電機産業で働く者の代表として ミライを語ろう！

電機産業で働く者の代表として、職場の想いを正面で受け止め、その想いを届けつづけている3人の政治顧問。参議院議員としての任期が6年目になり国会での存在感がますます高まる石上議員、組織内議員として初の女性国会議員となった矢田議員、2年前の衆院選で初当選を果たした新鋭・浅野議員を迎え、今取り組んでいる政策をはじめ、働く方々の生活をもっと豊かにするために今何をすべきかを語り合いました。

中央執行委員長 野中孝泰

1962年生まれ、福岡県出身。松下電器労働組合連合会（現パナソニックグループ労働組合連合会）副中央執行委員長、電機連合副中央執行委員長・書記長を歴任、2016年より現職。



電機連合 政治顧問 矢田わか子

国民民主党 参議院議員。大阪府大阪市出身。松下電器労働組合中央執行委員、パナソニックグループ労働組合連合会副中央執行委員長を経て、2016年に初当選。所属委員会は、内閣委員会、決算委員会 ほか。



電機連合 政治顧問 浅野さとし

国民民主党 衆議院議員。東京都八王子市出身。日立製作所労働組合研究所支部執行委員、大島章宏衆議院議員秘書を経て、2017年に初当選。所属委員会は、経済産業委員会、原子力問題調査特別委員会 ほか。



電機連合 政治顧問 石上としお

国民民主党 参議院議員。新潟県柏崎市出身。東芝労働組合副中央執行委員長、東芝グループ労働組合連合会副会長などを経て、2013年に初当選。所属委員会は、経済産業委員会、ODA特別委員会 ほか。

統一地方選・参院選 変革の年 初心を新たに

野中 明けましておめでとうございませう。本年もよろしくお願ひします。

わたしたち働く者のために日々奔走していただいている三顧問にとつて、お正月は骨休めができる貴重な時間かと思ひます。

石上 わたしが地元・新潟に帰省するのは多くて年に2回です。妻も娘も働いているので、正月に家族全員で帰省することは多くはないですが、そんな時は家でゆっくり過ごすようにしています。

野中 矢田さんはおせち料理を自分で作ると聞いていますか？

矢田 はい。国会議員になつてからは重箱すべてを埋めるほどは作っていませんが、「まめに働く」という意味を込めて黒豆の煮物やごまめ（田作り）、あとは「先の見通しがよくなる」ということでレンコンの煮物などはなるべく自分で作るようにしています。もともと料理が趣味で、作っている間は素の自分に帰れる解放感がありますね。

浅野 年末年始といへば、街宣活動や地元のあいさつ回りが中心ですが、じ

つはやりたいことがあります。ひとつは子どもに風揚げを体験させてあげることに。もうひとつは最近サボりがちになっている庭木の手入れです（笑）。

野中 みなさん、正月の過ごし方はさまざまですが、ご家庭でゆっくり、というのが共通点ですね。さて、正月は気持ちを新たにしたり、初心を思い返すタイミングでもあります。石上さんは議員として迎える6度目の正月ですが、議員になった時の初心と現状はいかがでしょう？

石上 この5年半はあつという間でした。とにかく、働く方々や今の生活に苦勞されている方々の声を国政に伝えて改善をしようと、その一心で「全力で聴く。全力で届ける。」というスローガンを掲げてスタートを切らせていただきました。みなさんの生の声を国会で伝える機会は多くありました。それでもすぐに改善されることは難しく、根氣強く何度も伝えることで、ようやく一歩前進するというケースがほとんどです。たしかに粘り強さが必要な仕事ですが、伝え続けることの大切さを感じています。

矢田 法律改正でも予算審議の場でも、わたしたちのような働く者、国民の声はなかなか届かないのが現状です。その半面、現場の声を大切にされる国会議員の方々もいらっしゃると感じます。委員会での発言ばかりが目立ちますが、各省庁の方々に個別に訴えていくという手法も学びました。今は、わたしたちの政策の実現のためにはどう動けばいいのかということを常に意識して、あらゆる方法を模索しているところですよ。

野中 一番新しく国会議員になられた浅野さんはどうでしょう？

浅野 わたしは石上さんと矢田さんの選挙中は組合の執行部の立場から応援させていただきました。この一年間、国会でわたしが見てきたのは、組合員の声を真摯に国会に届け続けているお二人の姿です。当選前の約束通り、本当に、わたしたちのために懸命に訴えてきてくれたんだなど、当時のお二人に対する期待感を思い返し、とても感動しました。わたし自身、現場の声を届ける、組合員が安心して働ける環境をつくるんだというモチベーションで挑戦しましたが、初心に立ち返り、3人で連携を取りながら実現に向けてがんばらなければいけないとあらためて思います。

野中 当然ではありますが、電機連合の組合員約57万人の思いを背負い、議員バッジを付けるという重責があると思います。

石上 国会議員に挑戦することを決断をしたときに思ったことがあります。それは、労働組合としてめざす方向と、国会議員としてめざす方向は、最終的には「生活者の暮らしをより良くする」という一点であるということでした。労働組合であれば、賃金を上げた労働条件の改善、地域の生活環境の改善のために地域の議員と連携します。同じように、国会議員は各省庁と連携を図り、世の中にあるルールを時代に沿ったかたちに変え、新しい仕組みをつくる。突き詰めれば、みなさんの暮らしをより良くするという共通の目的にたどり着きます。そのために、覚悟を持って国政と向き合わなければいけないと考えています。

質疑で感じた 伝えることの重要性

野中 職場の声を国政にぶつけて、未来への見通しがよくなり始めた事例などはありませんか？

浅野 わたしは経済産業委員会で活動していますが、2018年はSociety 5.0（ソサエティ5.0）を

はじめとする第4次産業革命が大きなテーマとして取り上げられました。まさに電機産業がかかわるIT、IoT技術を世の中にどう生かしていくのかという論議です。たとえば、地方の医





師不足が深刻な問題になっています。こうした医療現場にIT技術を導入すれば医師不足の問題を軽減できるのではと考えていますが、そのためには行政支援が必要です。そこで、当時の経産省と厚生労働省の連携の欠陥を指摘し

た結果、改善の兆しが見えてきました。地域や現場に、実際に足を踏み入れているからこそ気づける不完全な部分を、このように一つひとつ改善していきたいと思います。

矢田 わたしは昨年の通常国会では25回の質疑に立たせていただきましたが、その中で手応えを感じたのが待機児童問題です。ご存じのとおり、保育園にお子さんを入れられずに困っている方が大勢います。育休を取っても保育園に入れない場合は期間を延長する他ありません。しかし、育休を延長した家庭のお子さんは、これまで待機児童としてカウントされていませんでした。つまり、表に出ている待機児童の数は一部で、隠れ待機児童が実は多く潜んでいたのです。実態値を把握しなければ、予算がつくわけがありません。そのことを当時の厚生労働大臣に訴えたところ、2018年の4月から、保育園に入れないためにやむを得ず育休を延長した方もカウントするようになりました。また、ベビーシッターの補助制度についても「3000人以上」という企業の枠で一律の補助金しか出ません。これには無理があります。3万人の企業でも10万人の企業でも同額の補助では、従業員を支えきれません。こちらについても、少子化担当大臣や厚生労働大臣に訴えたことにより、改善に向けて動き始めているところです。



野中 ベビーシッターの補助制度の実態は知りませんでした。

矢田 委員長だけではありません。国会議員の中にもこういった実態を把握されていない人は多くいます。ですから、各省庁の大臣にお伝えすること、また、各省庁の大臣にお伝えすること、これも大事なことです。周囲の国会議員にも問題を知っていただくために発言することも重要なことです。みなさんに同じように問題意識を持っていただくこと

で、わたし以外の議員からも次第に声が上がるとなれば、解決に向けて踏み出すことにつながります。

野中 「現場・現物・現実」そして言い続けることの大切さをあらためて感じますが、石上さんはどのように思っていますか？

石上 矢田さんがおっしゃったように、野党として、他の議員の方々に今の実態を知っていただくことも役割のひとつだと考えています。また、出てくる法案の条文ごとに一つひとつ取り上げ、質問して、それに対して答弁させることによって法は決まりますが、その後に控える政省令との連携や細則を決める部分にもその議論を反映させるのが野党として担う役割です。さらに、電機連合の政策・制度実現に向けた要求方針についても発言し、電機産業で働く方たちの支援のための予算を審議のテーブルに乗せることも意識しています。あらゆるところからクサビを打ち込み、少しずつですが前に進めてきたというのが実感です。

野中 みなさんとともに、職場で起きている問題、企業や産業で起きている問題、または地域を回って見聞きした問題を正面から受け止め、国政の場で伝えていただけているということをおあらためて感じました。

国会で初めて「IoT」を 取り上げた石上議員

浅野 石上さんの大きな功績のひとつとして、ぜひ紹介したいことがあります。実は国会で初めて「IoT」というワードを使ったのが石上さんなんです。

野中 (笑) もっと自慢してくださいよ！



石上 あまりそういう認識はなかったのですが、周りの議員さんにも言われて、ああ、そうだったんだ、と(笑)。IoTというワードは、当時の日本ではまだ耳慣れなかったかもしれないですが、CESという世界最大の家電見本市では当たり前のように行き交うワードでした。電機産業にかかわる者としては当然のように使っていたのですが、それを国会で発言することがきっかけになり、論議が始まったのならとてもうれしいと思います。

野中 そういった意味では、ますますみなさんの存在感が高まる予感がしますが、今後どのようなシーンで電機産業が社会に貢献できるとお考えでしょうか？

石上 今、日本が抱える最大の問題のひとつが人口減少、ひいては労働力人口の減少です。日本は戦後の高度成長期を経て、50年、60年をかけて道路や橋、建物などのインフラを整えてきました。しかし、それらは次第に老朽化しており、今再び50年、60年をかけて改築しなければなりません。世の中の労働力人口が減少する中で、それらをチェックする目を「ヒト」に頼るのには限界があります。そこで、電機産業のセンサーやIoTなどといった技術を使って、補修工事が必要なタイミングを計ることも可能だと思います。



野中 日本は自然災害が多いだけに、老朽化したインフラの対応は急がれる事案です。その際にわれわれの技術を生かしていきたいですね。第4次産業革命についてはいかがでしょうか？

浅野 第4次産業革命はメイントピックスとしてこれまで取り上げてきましたが、議論すればするほど、電機産業が社会に貢献するチャンスは大きく広が

がっていると感じます。たとえば、今後はデータが価値を生み出す時代になりますが、データそのものに価値はありません。それをどう生かすかによって価値が生まれます。活用シーンの例をあげると、家庭の電氣量を測るスマートメーターのデータを分析すれば各家庭のライフスタイルに合わせたサービスを創出できる可能性があります。

矢田 わたしが構想していることはふたつあります。ひとつは、枯渇する財政の中で膨らみつつける社会保障費に対して、医療現場の無駄を省くこと。

たとえば、マイナンバーを利用して医療費分析を行えば、重複した治療費や薬代を抑制することになり、財政支出のスリム化につながると思います。もうひとつは、エネルギー問題です。原子力に不安を持つ方もいますが、安全性を追求した施設整備や廃炉に至るまでのプロセスを、省エネ・再エネも含めた提案をするのは「電源別ベストミックス」という政策を掲げている電機産業だと、最近強く思います。

野中 日本は「超」がつく高齢社会を迎え、それを支える生産年齢人口が年々減少するという、世界に類のない人口動態です。その中で、持続可能な社会をつくり上げていくため、電機産業としてIoTや第4次産業革命をう

まく融合すれば希望を見い出すことができそうですね。

浅野 世界はもうその方向に動き出しています。日本ももっと加速していかないといいけません。

石上 スピード感は課題のひとつです。「コネクテッドインダストリーズ」(※1)と声高に宣言した政府ですが、企業と連携がとれていません。日本政策投資銀行のアンケートでは、4割近くが「そんな政策知らない」と答えています。

※1 コネクテッドインダストリーズ…2017年3月、政府が発表しためざすべき産業の在り方。

電機産業出身のわたしたちが 電機産業の可能性を訴える

野中 スピード感を持って推進できない障壁は何なのでしょう？

矢田 IOTやAIという言葉ひとつとっても、深く理解している人がどれほどいるのだろうか疑問に感じます。電機産業出身のわたしたちが、電機産業の技術、商品、可能性を、もっと各省庁や国会議員に訴えなければ、彼らに「技術革新はもうここまで来ている」「この分野に投資をすればグローバルに戦える」と意識づけてできないのだらうと思います。

石上 確かにその通りです。そういった訴えを続けなければいけません。

浅野 経済産業省の資料を見てよく思うのは、美辞麗句ばかりで、斬新さや夢がないんです。そこを埋めるのはわたしたちの役目なのかなと考えています。たとえば、矢田さんがエネルギー問題を取り上げましたが、バーチャル・パワープラントという考えもそのひとつです。民家に設置されたソーラー発電や蓄電池、EVの電池、地域に点在するさまざまなエネルギーをITの力で連動させて、バーチャルな発電所として機能させることで、リスクを最小化して安定してエネルギーを供給できるかもしれません。そういった提案は今後より力を入れて取り組んでいきたいと思っています。

野中 電機連合では第7次産業政策に着手しています。今は、第4次産業革命が進んだ先の社会や技術革新を想定したうえで、働き方や人材育成の方向性を検討しているところです。この政策についても、みなさんの今後の活動の参考にしていただければと思います。

石上 もちろんです。電機連合、電機産業の向かう先が定まれば、その道を切り開いていくのがわれわれの仕事なので、ぜひ参考にさせていただきます。

野中 第4次産業革命の進展により、産業の壁がなくなり、産業構造が変わり、就業構造も変わるでしょう。変化というものはいつでも不安が付きまとうものですが、働くみなさんのためにも、ぜひ協力いただきたいです。



問題残る働き方改革法 附帯決議で申し送り

野中 働く者として、2018年の大きなトピックになったのが働き方改革関連法案でした。しかし、複数ある法案の一つひとつが重要なのに、最終的には1本にまとめた論議になり、「荒っぽい」印象を持ちました。

矢田 おっしゃる通り、それぞれの法案は趣旨が違うにもかかわらず、東ねて審議し採決を取ろうとしたことに問題がありました。入り口の段階からボタンを掛け違えた印象が拭い切れません。さらに、労働者の権利保護の法律のはずなのに、まったく逆の裁量労働制や高度プロフェッショナル制度といった新しい要素を十分な審議もせず無理やり入れ込もうとしたことも問題です。本当に働く者の声に耳を傾けたのか、常に疑義を訴えてきましたが、明確な回答は得られませんでした。

浅野 わたしも矢田さんと同意見です。これだけ重要な法案を提出するにあたって実態を把握していなかったという事実も、大きな問題です。

石上 一方で、労働基準法が制定されてから初めて罰則付きの時間外労働の上限規制が設定されたのは画期的なことでした。長時間労働の是正は組合活

動の延長でもあるので、時間外労働に對して100時間というところでキヤップをはめる措置自体には賛成ですが、「100時間」にこだわることは反対です。何よりも「長時間労働の是正」を第一義にするべきなので、数字にこだわるのではなく、根本的な課題解決が必要だと思います。

浅野 労働監督行政が上限規制をしつかりとチェックできるかも課題ですね。そのことを後回しにして、法律を成立させることを目的とした与党の対応は、非常に大きな問題だったと思います。われわれは、成立したら終わりではなく、これから野党の行政監視機能を果たしていかなければなりません。

野中 国会は最終的には多数決になると思いますが、そうなると与党が有利

になります。現場を知っている立場だからこそ歯がゆいのですが、今回は附帯決議（※2）を付けられましたね。

※2 附帯決議…政府が法律を執行するにあたっての留意事項を示したもの。法的効力はない。

矢田 まさにその通りで、数の力で押し切られる法案は少なくありません。それが本当に民意に基づくものならば問題ありませんが、働き方改革しかり、IR法案しかり、このまま世の中に出すことに問題がある場合、わたしたちは附帯決議を付けます。ここにはまだ欠陥がある、こういう注意点があるということを書き添えるのは、立法府の責任においてやらなければならないことだと思っています。働き方改革法案

に付けた47項目の附帯決議は、組合活動への申し送りとも考えているので、闘争で会社側と働き方を協議するときには必ず役立つものになります。附帯決議そのものの注目度は低いかもしれませんが、これを機にぜひ決議文を読んで活用いただければと思います。



入口の衆議院 出口の参議院

野中 社会の制度が現場に大きな影響を与えることから、わたしたちはもっと政治に目を向ける必要がありますね。法律を決めるプロセスのなかで、衆議院と参議院の役割の違いについての解説をお願いします。

石上 時代に沿ったルールづくりの必要性が各省庁で課題に上がったとき、各省庁に紐づく審議会に諮問され、課題の解決方法が文章として表され、法というかたちでわたしたちの元に届きます。果たして成立させるべきかの議論の場において、衆議院と参議院は違った角度で議論をしていきます。まず衆議院は、各地域から選出されているので、国民の代表として幅広い観点から議論します。このことから「入口の衆議院」といわれています。全体像をつかみ、課題を浮き彫りにして国民に認識してもらうのが衆議院です。一方、参議院は、法律として社会でちゃんと機能していくのかを細部にわたって議論します。衆議院を通過しても附帯決議を付けることができる役割があり、「出口の参議院」ともいわれます。

浅野 衆議院は、より世論を反映した院であるとされています。国民は今日のような意見を持っているのかを代弁

する責任があり、だからこそ、住んでいる地域によって環境は異なるので意見もバラバラです。それをぶつけ合うのが衆議院なので「言論の府」と表現することもあります。

矢田 参議院は6年間解散がないので、じっくり腰を落ち着かせて議論できる



という特長があります。附帯決議を付けるのも参議院が多いんです。ですから、わたしの認識としては「機動性の衆議院」「熟議の参議院」といった感じですね。われわれ3人は衆参で分かれているので、お互い連携をとってやっていきたいと思っています。

結論を急ぎすぎた 外国人労働者問題

野中 社会政策についても意見交換をしたいと思います。労働力不足の問題に対して、最近は外国人労働者が注目されています。これについての課題と何でしょうか。

浅野 わたしの拠点としている茨城県に限っても、外国人の技能実習生を受け入れている事業所は多くあります。どの企業も近年は人材確保に大変苦労しているので、より多くの労働者を受け入れる必要性は感じています。しかし、2018年の臨時国会では、外国人労働者を単なる労働力としか見ていないと思う場面が散見されました。彼らにも家族があり、人生があります。彼らが日本でも安心して働ける、暮らせる環境整備まで含めた議論が必要なのではないかと感じます。

矢田 単なる労働力不足を補う政策か、それとも日本の技能を東南アジアはじ

め諸外国に広げるハブを担う政策か。どちらが目的なのかを政府に問いたですと、前者だと答えられました。そうであるならば、これまでの技能実習制度とは別物と考えるのが当然ですが、中身を見れば技能実習制度と変わらな。現在、29万人くらいの技能実習生の方がいますが、使い勝手のいい労働力ととらえて、時給400円で働かせたり、時間外労働が百数時間に及んで正勸告を受ける企業が1000社以上あります。そういった実態を検証したうえで次のフェーズに進むべきです。また、社会保障費が膨張する中で、外国人労働者とその家族の方々をどうサポートするかという議論も必要です。

石上 策を講じる前に、実態を正しく把握する必要がありますね。政府はこの5年間で450万人の生産年齢人口が減ったといいますが、女性やシニアの活躍が増える今、果たしてそこまで極端に減っているのか。もしかすると、商品の販売単価を上げることで賃金も高くなれば、人手不足を解消することができるかもしれません。そういったさまざまな角度で検証した積み上げ式の議論を重ね、最終的に外国人の労働者に頼るといふ結論に行き着くのならいいのですが、乱暴に「とにかく外国人」という結論に結びつけるから、不安や弊害が生じるのだと思います。

社会保障問題は 根本的な論議が必要

野中 矢田さんから社会保障のお話が出ましたが、職場のみなさんは持続可能な社会保障制度には強い関心を持っています。

石上 本当に難しい問題です。社会保障費は年間約120兆円かかると思いますが、2040年には190兆円になる見通しです。70兆円も増える半面、生産年齢人口は減っていくという矛盾が生じています。もう目をそらすことのできない時期に来たにもかかわらず、いまだに政府は「給付を抑制する」の一辺倒で、目先の対応に終始しています。

す。根本的な議論をしなければ、立ち行かなくなるときが本当に来てしまいます。

野中 国民民主党内でもこの論議が進んでいると伺っていますが？

矢田 国民民主党には社会保障調査会があり、負担と受益のバランスを整備した政策を打ち出す予定です。そもそも消費増税は、半分は財政健全化、もう半分は社会保障の充実という方針で、格差の是正も第一義的な目標でした。

しかし、政府が打ち出したのは幼児教育無償化。富裕層も含めた無償化をするよりも、まずは保育園にも入れない待機児童問題の解決を優先するべきだという意見も出ています。

浅野 財源を確保するには「入るお金を増やす」か「出すお金を減らす」かのどちらかです。入るお金としては消費増税などの税制改革が必要です。一方、出すお金を減らすには社会保障給付を減らす議論などがされていますが、わたしは給付額にばかり目を向けるよりも、健康寿命を延ばすというアプローチが有効だと思うんです。電機産業の持つ技術がヘルスケアの分野で貢献できる可能性は十分にありまして、国会だけでなく、産業界と連携しながら議論しなければいけないと思います。

野中 国民が健康であれば医療費の支出が減るわけですから、財政への負担軽減につながりますね。健康保険組合の財政も拠出金が大きな割合を占めるため、現役世代の健康づくりの活動にお金が回らないといえます。こういったことも一つひとつ議論を積み上げて推進していただければと思います。

新しい時代の幕開け それぞれの挑戦

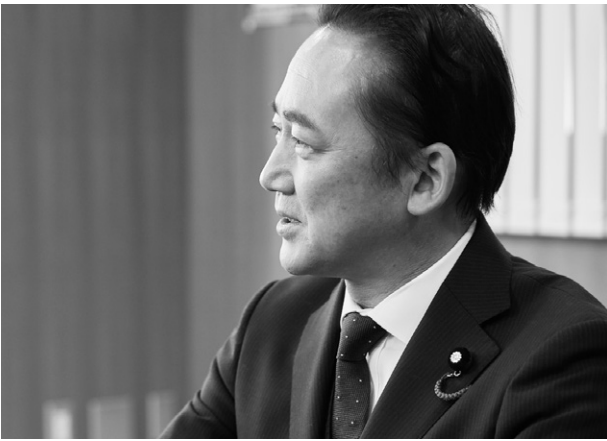
野中 海外に目を向けると分断社会が目につきます。日本も対岸の火事ではありません。国がひとつにまとまるかは、ある意味政治のリーダーシップにもよりますが、今、日本の政治は、民主性が失われているように感じます。

石上 現在の投票率の低さは、国民の政治への関心の低さを反映しています。見え方の問題もありますが、「何をやっているんだ」とあきれられているのも一因でしょう。また、政治に頼らなくても暮らしていける、という認識も政治から心が離れる要因になっていると思います。いずれにしても、国の中が分断されることはどこかで火種が上がっているからです。国民のみなさんに注目していただき、きちんと方向付けできる活動を心がけ、愚直にやり続けることが重要だと思っています。

浅野 政治の観点でいうと、与野党の分断、野党内での分断があり、根っこを辿ると「ワン・フォー・オール」精神の欠如なのではないかと考えています。また、小選挙区制度導入以降、目の前の選挙にエネルギーを注ぎ込むようになり、大衆迎合的な政策をメデイアコントロールによって届ける傾向が強まりました。選挙に勝つことは大事ですが、同時に将来を見据えて与党も野党も包摂するような政治をめざさなければならぬのではないのでしょうか。

矢田 わたしは、職場と国会、政治と組合員をもっとつなげたいと思っています。日本は民主主義の国だと信じていましたが、国民の声が国会の中まで届くことは少ないのが実態です。数の力で押し通すような政治が本来の意味で民主主義と言えるでしょうか。国民の声が届くような真に開かれた政治をめざすためにも、国会で起こっていることを組合員、職場に伝えていくことが大切だと思います。

石上 基本はとにかく職場のみなさんをはじめ、生活者の方々と会話をさせていただき、日頃どのようなところに課題を感じているのかを認識し、国政に伝えて前に進める。その繰り返しだと思います。今後も全力で聴き、全力で届ける、という政治スタンスを常に忘れず活動していきます。



野中 勝負の年となる2019年。どのような年にしたいか、みなさんの決意をお聞かせください。

浅野 2019年は何といっても元号が変わる年です。新しい時代の幕開けに、電機産業としてもさまざまな変化が起こりはじめる一年になるのではないのでしょうか。わたしとしてはきちんと現場の声を届け、ルールに反映できるようにしていきたいと思っています。そして、わたし自身がもう一皮むける一年にしたいと思っています。

矢田 大きな転換点となる年に、新しい理念を打ち出すことが必要だと思います。政治は古い世界のままできています。議場にはスマホやタブレット端末を持ち込めず、紙の資料であふれています。国会そのものが変わる節目になればいいと思います。また、統一地方選挙と参議院議員選挙が重なる政治決戦の年でもあります。壊れた民主主義を立て直し、国民に主権が戻るスタートの年にしたいと思っています。また、わたし自身は各組合から十数本の政策提言をいただいております、社会を変えるパートナーとして国会でがんばります。

石上 参議院議員選挙に再び挑戦させていただけると感謝しています。ぜひみなさんの思いを国政に届ける仕

事を引き続き担わせていただきたいと思っています。とにかくみなさんの暮らしを良くしたいという一心のもと、信念をもって取り組んでいきます。また、統一地方選挙に挑まれる多くの仲間、議員とも連携した活動を続け、電機産業で働くみなさん、地域で暮らすみなさんが幸せな暮らしを送れるよう力を合わせていきたいと思っています。わたしもみなさんへのご支援、応援を全力でさせていただきます。

野中 石上さんは議員からの信頼も厚く、実直な人。「全力で聴く。全力で届ける。」ということをや元からやり続け、そこに共感する仲間がたくさんいます。この選挙は非常に厳しくなると予想されていますが、電機連合57万人の総力、組織力が問われる戦いでもあります。みんなでともに挑み、必ず願いを实らせたいと思います。

浅野 すぐそばで石上さんの活動を見させてもらいましたが、人柄はもちろ

ん、議員からの信頼の厚さは本当に驚きます。これからの国民民主党をまとめ上げる兄貴分として、また、経済産業委員会所属とともに電機産業の政策を実現するために、何としても石上さんには引き続き、組合員のためにがんばっていただきたいと思っています。

矢田 当選以来ずっとお世話になっていますが、同僚はもとより、与野党を超えて石上ファンは本当に多いんです。今の政治家に求められる実直さ、正直さ、公正さを持ち合わされた姿が多く、の共感を呼ぶのだと思います。何十万人もの負託を受けて活動する政治家として石上さんは「こうありがたい」と思う鑑（かたみ）でもあります。そういう先輩の後

ろをこれからも追っていききたいと思っています。

野中 2019年は己亥（つちのえ）と書き、十二支の最後にあたる年です。「己」の意味は、生長した植物が整然と生い茂った状態。逆に、「亥」はまだ種が芽吹いていない状態をいいます。生長した木々は文化や経済の象徴であり、ひとつの時代が終わり、まさに新しい時代の萌芽を迎える年になると期待しています。本日はどうもありがとうございます。

